

国際交流情報

★

大学美術教育学会国際交流委員会
2009年 8月10日(月)

創刊号

編集：山口喜雄〔委員長／宇都宮大学〕

「国際交流情報」創刊の言

国際交流委員会事務局 香川大学 ■安東恭一郎

このたび、大学美術教育学会国際交流委員会では、定期的にその活動や情報を提供する冊子『国際交流情報』を発刊することとした。この冊子を広く学会会員に講読していただき、今後の学会活動がより国際的視野をも含めた研究活動を展開し充実させていくことを期待する。

近年美術教育の学的探究は「教育史研究」「授業研究」「発達研究」「内容学的研究」など多様な広がりを見せつつある。こうした学術的な視線は日本国内のみならず世界各国の美術教育にかかわる研究の知見を求め始め、学的発展のため国際的な視野を持つ必要性を帯び始めている。

大学美術教育学会の会員の多くは、学会創設以来現在に至るまで西欧に渡航・留学し、その成果を学会発表やシンポジウムなどで開示し、日本の美術教育発展に大いに寄与してきた。加えて、海外から日本への留学生も増大し、日本において習得した美術教育研究が国内外で活用されつつある。

一方、これまで国際的な研究活動は多くの場合、個人の努力によって展開され紹介される状況が基本となっており、組織的に支援したり活動したりする場面がほとんどなかった。そのため海外留学で得られた知見や国際的な美術教育研究の取り組みは、関心のある研究者のごく限られた範囲にしか行き渡らない現状もあった。大学美術教育学会では、組織的な国際交流を展開する第一歩として2003年度に韓国美術教育学会と国際交流協定締結を実現した。また、2008年度には中国の美術教育関係者との連携により、大学美術教育学会が中国を訪問し学術シンポジウムを実現する事が出来た。既に日本は韓国や中国からの留学生を多く受け入れ、そうした留学生の多くは大学美術教育学会会員として学会活動を支えており、その成果がこうした学術協定締結や海外シンポジウムの開催を実現させたと言える。国際交流委員会では、こうした交流実績を基盤としながらさらにその活動がより多くの学会員の研究活動の資となるためには、定期的な国際交流情報を学会員に提供する必要性があるとの結論を得た。

今回、国際交流委員会から情報誌『国際交流情報』を発刊することで、学会員の国際交流活動を定期的に紹介したり、国際的な美術教育研究の動向を発信したりできる。また、日本に現在留学中の留学生や留学生を支援する方々の情報交換の場として、日本留学を終えて本国にて活躍されている海外研究者からの投稿も呼びかけたりすることにより、留学生を中心とした新たなネットワーク形成の一助ともなろう。このように、国際的な研究活動や国際的な研究内容を精力的に取り上げ、刺激的な発信源となる冊子を発刊していくことで、美術教育がさらに発展することを願う。

事務局ごあいさつ

国際交流委員会事務局 茨城大学 ■向野 康江

国際交流委員会事務局は、「国際交流委員会会報誌の発行によって、世界各国における美術教育の状況を会員の皆様方にお伝えするとともに、わが国の美術教育や美術文化を世界に発信し、美術教育の国際化に寄与したい」という山口喜雄委員長の発案により、本誌が皆様の海外発展への契機になればと願っております。

近年、情報社会化が著しく進み、美術教育の質が問われるようになってまいりました。わが国でも、アジアへ目を向けるべきであるという浜本昌宏前委員長の方針は、これからますます重視されていくでしょう。特にわが国における経済の低迷は、もはやエネルギー消費拡大型の文化よりも、省エネ型文化・自給自足型文化形成へと課題を移行させています。そのような課題はいずれ美術教育にもたらされるかもしれません。

されど、私たちには、海外から様々な教育方法を学ぶチャンスがあります。どのような方法を選択したらよいかしばしば迷うこともあるでしょうが、このような状況下であるからこそ、これからは自国の文化を大切にするとともに、他国の文化をもしっかりと理解していく教育がますます大切になってくるでしょう。

また、美術教育は言語を超えて造形によって相互を理解し合えるという、他領域とは異なる特長も持っています。その特長を生かしていけば、研究交流の国際化が充実し、研究視野も拡大していく可能性が十分あると考えられます。当委員会事務局は、海外との情報交換を促進し、国際的に活動していくこととする方々の支援をしていけるよう努力していく所存です。

■ フランスの美術教育をめぐって

元三重大学 ■浜本 昌宏

フランスは芸術大国として知られている。市民の日常生活や意識の中に、芸術性の尊重が強く伺える。興味ある調査がある。2001年のBeaux Arts Magazineによれば、若い教師の96%が「教育に芸術文化が必要」と回答を寄せている。

フランスの教育は、子どもの側に立つ、ルソーやペスタロッチ等の人間性の覚醒や自由を基軸とした教育観に立つことから、芸術教育の役割と通底するのであろう。したがって造形の授業内容は、教科書に基づくのではなく、子どもの実態に応じて創造的に立ち上げ展開する。上意下達・画一的なことは否定的。同じ学校の同じ学年でさえ、クラスごとに授業内容や教材が違う場合もあるほど、教師の授業設定の裁量権は大きい。

先の調査で、自分が学校で受けた造形の授業の記憶についての質問に、「休息」とした回答が60%以上もあることは、おそらく精神的自由の下での安らぎ観を示すのであろう。そこは、単なる遊びではなく、発達要求としての創造的自己表現が満たされる、心地よい場である事が感じられる。

最近では、国際状況の変動に伴い、とりわけ移民を多く抱えている事もあって、国策として、フランス語教育の充実が打ち出され、合わせてフランスの伝統的芸術文化の尊重と継承が課題となっている。

教育重視の政策は予算にも反映、大学生に至るまで授業料は無料。他方、学びの自由と拡大に繋がる、2ヶ月間ものバカンスが、創造的ゆとりとして、家族ぐるみの美術館めぐりや、異文化を堪能する旅行など、表現の基盤となる生活ぐるみの自立的学習が国民的に持続されている。

■ 組織の活性化

聖徳大学 ■仲瀬 律久

2008年夏の第32回InSEA世界大会in大阪が、もし今夏だったとしたらと思うとぞっとします。世界的な大不況、インフルエンザ蔓延の恐怖などなど、国際会議開催にあたっての不安要素は昨年比ではないからです。

それにしても昨夏は久しぶりに歴代InSEA会長を始めとして、数多くの旧友が世界各地から参加してくれました。しかしその反面、残念なことにE・アイズナー、A・エフランド、G・クラーク、E・ジンマーマンなど、われわれに懐かしい顔ぶれは体調不良その他の理由で来日されませんでした。これらの諸氏はかなりの年配になっているので仕方がないことかもしれませんが、そのことは、我が国の参加者についても言えることで、確実に世代交代が進んでいるのを見て取れます。機構や組織が若返ることは最高です。本国際交流委員会も同じで、そのことにより活性化します。

さて、昨夏の国際会議は、運営委員長の福本謙一先生が再三強調されていたように、世界大会を契機にして我が国の美術教育の活性化を図ることが大きな目的となっていました。そのために、力を結集するという意味での全国大会の一本化の試みが2007年の熊本大会を皮切りに大阪大会で実現し、世界会議の参加者に拍車をかけたということがありました。参加者数においても世界大会としての面目を保つことができたのは、そのことが一因としてあると思います。同じ様に、国大協と全美連は橋本理事長のご努力もあって、国公立私立が組織的に一体化して全国大会に立ち向かうという形になったことは喜ばしいことで、今後に期待が持てます。

これらの一連の活発な動きが、国際会議が終わったとたんに滞んでしまうのではなく、今後も継続していくことにより、美術教育のパワーがより一層強固なものになり行政にも影響を与えていくようになることが願いとしてありましたし、現在もあります。そのことを、われわれはいつも念頭に置いておきたいものです。

■ 国際交流委員会報告

兵庫教育大学 ■福本 謙一

昨年のInSEA世界大会では、「伝統文化を若者にどう伝えるのか」というテーマのシンポジウムをいくつか設定した。そこでは目的論としての自己アイデンティティの確立(台湾)、国家アイデンティティ(トルコ、フィリピン)といったことが話題にされたし、文化間の対話や創造性の触媒としての文化認識をする必要があることや国際関係の要素としての文化(EU)をカリキュラムの中核にすべきであるといった大胆な提言もあった。

どのような対象を提示すべきかという点に関しては、文化遺産のみならず

文化の多様性(韓国)を知らせることが望ましいという意見が提出された。こうした検討の中で様々な課題が浮かび上がってきた。若者文化との親和性をどう確保するのか(スロベニア)、教育内容として何をどの程度まで含めるのかという精選の問題、どう教えるのかという教育方法の問題といったことと合わせて、そもそも伝統文化は学ぶ必要があるのだろうかといった意見も出されたが、同じ「伝統文化」という言葉も、その歴史性や地域性、政治的動向を背景にして違った様相を示す。今後もこうした国際的な視野の中で伝統文化に関する教育を相互に検討する機会を持っていきたいと考えている。

平成18年12月に教育基本法が改正され、その教育目標のひとつとして、「我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成」が明記された。この教育基本法改正を踏まえて改訂された新学習指導要領では、「確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する『生きる力』」の育成を理念として、伝統と文化に関する教育が重要な役割を有するものとされている。学校教育の教育課程においては、国語科の古典、社会科の小学校歴史学習、中学校の地理・歴史・公民の三分野、技術・家庭の伝統的な生活文化、音楽科の唱歌・和楽器、美術科の我が国の美術文化、保健体育科の武道などの内容が充実事項とされた。平成23年度からは小学校、平成24年度からは中学校において新学習指導要領の内容に基づく伝統と文化に関する教育の具体化が切実な課題となる。この課題に対しては、国及び各自治体において先駆的に実践研究がなされている。例えば、平成17年度から東京都教育委員会では「日本の伝統・文化理解教育推進事業」が始まっている。さらに、国立教育政策研究所の「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」が、全国の小中高の研究推進校(100校程度)において実施されている。兵庫教育大学連合大学院では、共同研究プロジェクトF『『伝統と文化』に関する教育課程の編成と授業実践の総合的研究』が開始されたが、海外の研究協力者も含めて伝統文化教育の理論的枠組みや実践の方向性を定位使用という試みである。

こうした動きと呼応して、「伝統と文化」に関する教育の実践研究を美術教育の枠組みで捉えることが今後求められるだろう。こうした視点についても国際的な研究交流が求められるだろう。

■ 2009年報告／リアルタイム中国美術教育事情

茨城大学 ■向野 康江

現在、中国では教員の給料が上昇し、教職は人気職種である。給料のみならず学校設備もよくなっている。美術教育に関する教科名は小・中学校ともに「美術」である。基本的には専科制で、小学校でも「美術」の教科は美術専門の教師が教えている。手芸、民芸、書道など、日本が手離してきた様々な学習内容が存在している。授業数は小・中学校ともに週に40～50分。実験校や富裕層の子供が通う学校では、工芸、美術、書道の各教室の設備も整って教員数も多い。学習方法も多様多様に試みられている。

しかしながら、都市部と農村の差は極めて大きい。農村部では美術の授業が無い学校もある。特に教師数が少ない学校では美術の授業は実施されない。政府が美術教科のことを第三専門と呼び、重視してこなかった経緯が、依然として農村部に投影されているように見える。自治区でも中国各省と同様の現象が生じている。ただし、民工学校(流動人口の子供が通う学校)の状況はまだ把握していない。

格差はあるものの、一般的には美術教育が盛んになっている。「なんでも鑑定団」が中国でも流行している。昔は文化物の個人所有が認められなかったのが、それらは海外へ流出し続けた。そこで、一般国民の所持も認めるようになった。それをきっかけに骨董品への関心が高まっているのである。この高まりを14年前から政府が推進した素質教育であると判断する意見もある。素質教育が開始された理由は、大学受験対策のための勉強しにくい傾向に国民が陥ったことによる。芸術によって素質教育の目標を達成しようとし、多くの大学に芸術教育センターを設置して芸術教育などを実施するようになった。結果は何の効果も無かったと考える方が適切かもしれない。大学受験制度そのものが変化していなかったためである。むしろ、大学が社会のニーズに応えるために、奇妙な方向に走ったことによって盛んになったと考えられる。

大学での美術教育は確実に盛況期にある。そうなった理由は、各大学が積極的に学生を受け入れたことによる。大学を卒業する最大のメリットは、教師になることができることである。将来の人生を安定かつ有利にするため、何としても我が子を大学に進学させたいという考えが一般的になった今、4000校もの大学に美術専攻・コースが設けられている。5年前に山東省では美術受験者が20万人を突破した。今年、河南省でも美術専攻の受験生は7万人に上った。他専攻・コースよりも美術専攻への入学ハードルが低いからだという。どうしても大学に進学させたかったら美術を選べばよいことになる。

社会的ニーズの受け皿として大学に美術専攻・コースを設置するという安易な対策は、逆に、美術専攻学生の質の低下を招いた。美術が好きで入学してくるわけがないので、学習意欲が無い、真面目に授業を受けない、抽象作品が多く基礎力が無い、卒業制作での盗作事件など諸々の現象を引き起こしている。対策として、学生への監督を強化する措置を取っているけれども効果は薄い。そこで政府は、大学での美術教育を減らし、専門性の高い大学院の拡充に切り変える方針を打ち出している。たとえば内陸地区の某大学は、学部のデザイン専門クラスを6→4→2クラスへと減少させ、大学院のM & Dコースを設置・拡大させた。大学院が大学評価の対象となっているからである。

美術専攻志望の大学院生数を増加させるために、修士課程進学の実験科目を「文化」という枠組みの一般基礎学科科目にし、その枠内科目で合格点に達すれば入学できるようにした。定員枠を増やし受験者が全員合格したという例はいくつもある。誰でも入れるので大学院生の質の低下が起きている。それでも政府は芸術修士の専門コースの設置を推進している。

一方では、修士課程にふさわしい高度な実技レベルが求められ、絵画領域専門の

学生であれば、在学中に一度は個展を開催しなければならない。授業料も高い。そうすると、学歴が欲しい社会人や芸術家などが進学してくる。実技試験無しで入学した院生たちも就職先を確保するために理論系から実技系へと進路変更する。しかし、現場では使いものにならないので結局は失業することになる。国家政策として就職を促進し、企業にも補助金を出しているものの、就職難の状況を抱えた中国では、美術領域コース修了=失業となる。最近になって受験制度改革の必要性がクローズアップされ、一部の重点大学では独自の選抜方法を試みている。以上が最新の中国での美術教育事情である。(報告者：茨城大学・向野康江・2009年5月13日、K教授より取材)

■ 米国における批評力をともなうビジュアル・リテラシーの育成について

広島大学 ■中村 和世

日米の美術・図画工作科の理論と実践の比較を通して気づかれるのは、米国では、視覚文化の「消費者」を育てるという考え方が浸透していることである。美術は、国語の言葉と同じように、個人的な出来事を超えて他者とのコミュニケーションを可能にする言語として捉えられ、「視覚的な読み書き能力」といえるビジュアル・リテラシーの育成を基本としている。この立場から、米国の小・中学校の教科書では、発達段階を考慮しながら、絵画、彫刻、工芸、デザイン、建築物など視覚文化にかかわる所産に共通するリテラシーの内容として造形要素と造形原理を骨組みとした題材が配列されている。造形要素とは、色、形、線、明暗などであり、造形原理とは、リズム、コントラスト、バランス、強調など空間構成の方法である。

現代においてインターネットなどメディアが発達するにもなっており、多様な価値を発する視覚的情報が日常において溢れている。また、グローバル化が加速する中で、外国にいかなくても普段の生活の中で異文化の視覚文化と接する機会が増えている。このような状況を考慮しつつ、日本の美術・図画工作科の現代化を図るために、多様な視覚的情報や視覚文化を読み解く力としてビジュアル・リテラシーを育成していくことが必要であると考える。また、そのようなリテラシーとは、機械的・記号的に読み取る力ではなく、表層的な価値観に流されずに自分ににとって価値あるものを見極め選択し自分の生活の中に取り込んでいくことのできる判断をともなう批評力を本質とするものである。

■ 岩手大学美術科の国際交流の取り組み事例

岩手大学 ■煤塚康二

美術科では3大学と国際交流を行っている。3大学は①山東工芸芸術学院、②吉林農業大学視覚芸術学院、③イタリア国立カッララ美術アカデミーである。

①では、2004年12月16日王秀存芸術学院副院長ほか10名が来学。翌年に教育学部附属教育実践センター長ほか4名が訪中し交流の協議。2006年4月27日、潘魯生芸術学院院長ほか5名が来学し、部局間学術交流協定を締結した。2007年1月に蘆谷収教授ら5名が訪中。2009年3月4日岩手大学で中国古代表演についての国際交流講演会を行う。同年5月中国で美術科の作品展が開催。2008年10月から同学院の留学生1名を受け入れている。

②では、2006年3月に吉林農業大学視覚芸術学院を美術科教員2名が交流準備のため訪中視察。同年度に吉林農業大学の訪問団が来学し、学長と学術交流。2007年に大学間交流協定締結、相互の大学において美術作品の国際交流展が開催される。10月31日から11月25日、吉林農業大学が会場、岩手視察団訪中。12月1日から6日、盛岡市が会場で、吉林視察団来訪。この度の交流展覧会の成果を確認、次回の交流に向けて現在検討中である。

③では、2004年にアカデミーへ数回国際交流委員長はじめ蘆谷委員らが視察訪問する。翌年アカデミーと部局間学術交流の協定を締結。2008年には学生交流協定を締結。同アカデミーの彫刻家マイケル・アーンシー氏の講演を岩手大学で行う。2009年には同アカデミーから留学生1名を受け入れている。

■ プロジェクト・ゼロでの在外研究

埼玉大学 ■池内 慈朗

2005年9月より、2006年8月まで、かつての恩師ハワード・ガードナー先生のもとで、在外研究の機会にめぐまれました。せっかくの機会なので、授業料を払って授業を正式に単位を取ることになりました。授業の形態もFDの流れらしく教師が一方向的にしゃべる20年前とは大きく変わっていました。リーディングの次の週までにしておき、授業ではガードナーがひとりづつあって、理解度の採りを入れてきます。半期の授業内で小さな研究を課して、ペーパーに仕上げさせるのは変わっていませんでした。私生活のほうでもガードナー先生は、「家族の生活は慣れたかね?」「なにが問題はないかね?」などと顔を合わせることに聞いてくれました。別れの挨拶に家族で訪れると息子(当時幼稚園E5であった)へのプレゼントのバス・ボール・ゲームをわざわざ用意してくれていました。当時20年前、院生であったころの私は、ガードナー先生に対して勝手に天才にありがちな他者に興味をもたない人といったステレオタイプでみていましたが、それは全く違っていました。在外研究を通して、学者としては申し分がないだけでなく、自分の学生のた

めには出来かぎりのことはしてあげる、温かみをもつた人間的にもすばらしい方であることがようやく分かったのです。

■ 2009年シカゴ&ニューヨーク美術館教育普及事情

宇都宮大学 ■山口 喜雄

新型インフルエンザが猛威をふるう直前の2009年3月、「美術教育文献のアーカイビングに関する発展的研究」(科学研究費補助金基盤研究A:課題番号19203036)の一環で、福本謹一(兵庫教育大学)・新関伸也(滋賀大学)の両先生と共にアメリカ合衆国のシカゴとニューヨークの美術館等に調査に向かった。以下に、要点を記述する。なお、通訳は福本謹一先生、記録は新関伸也先生、兵庫教育大学大学院の佐野真知子院生の協力も得て作成した。

〔1〕シカゴ美術研究所(美術館)での面談内容概要
日時:2009年3月3日 午後3時00分〜午後4時(現地時間)
シカゴ美術研究所(美術館) THE ART INSTITUTE OF CHICAGO
質問者:山口喜雄、福本謹一、新関伸也
対応者:ロビン・ステュア/美術館教育学生プログラム課長補佐

(ROBIN C.SCHNUR / Associate Director, Division of Student Programs
Department of Museum Education)

協力者:(学校教育研究科大学)

1. シカゴ美術研究所(美術館)における教育普及活動

日本でいうボランティア育成募集(友の会など)に当たるDOCENTプログラムを週1回実施。鑑賞方法としては、10年前までVTSを中心に行っていたが、話題がオープンエンドで多様な側面を引き出す面白さはあるが表面的に終わりがちであったため、現在はGoal /Object Oriented(目標の明確化)の方向性をとっている。すなわち、ディスカッションを行うが、決められた話題設定をするようにしている。最大の目標は見方を学習すること(Learning how to look)である。具体例としては、印象派ならその表面的側面からではなく、カメラがどう影響を与えたかなどのテーマ設定を行う中で話し合いを進める。

2. 教師向けのプログラム

1年間に12万人の小中高生が参加するスチューデントプログラムを実施している。鑑賞学習の方法として、VTSはもとより、目標に準拠した探求(objective inquiry)を扱う。その際、文献資料として、基本的には教師が第一次資料に当たれるようにデジタルオンライン化リソースを活用するように働いている。ワークショップでは、ディスカッション形式で行う。表現との関わりでは、現在改装中の現代美術作品展示館の地下に教育関係のエリアを設け、クリエイティブなセクションを配置する予定。

3. シカゴの美術教育の現状に関して

現実には美術教育は専科教師がない。専任でなく半日の複数学校担当の非常勤の場合が多い。全体的に美術の実施率が低いのではない。

カリキュラム編成は、校長の権限が強く、美術を重視しない場合はほとんど担当しない場合もある。

現在コアカリキュラムに美術・音楽・ドラマ(演劇)などを複合的な形で入れ込むため、視覚美術だけの教育は希薄になっているのが実情。

4. 美術館の教育プログラムを受講する教師の質問に関して

学習方法についてよりも美術史的質問が多い。「シュールレアリスム」のようにテーマを設定した目標型型のディスカッションをベースに行うので、どうしても美術史寄りの内容に特化したものが中心である。

〔2〕メトロポリタン美術館での面談内容概要

日時:2009年3月5日 午後3時30分〜午後4時40分(現地時間)
質問者:山口喜雄、福本謹一、新関伸也
対応者:エイミー・シルバ、教育課、成人教育担当主査(Amy Silva, Head of Adult Program, Education Department)

今回の面談で対応していただいたメトロポリタン美術館教育課のエイミー・シルバ氏は、25年の経験を持つ教育普及担当者である。成人教育担当主査となっているが、成人教育だけでなく、幼稚園から大学、成人教育全てを包括する部署を担当するとのこと。

1. アーカイブ関連

メトロポリタン美術館が提供するアーカイブ関連の収集、教育関連事業は、広範にわたり、図書館・学習センター、オンライン資料、イメージ資料、教師教育資料、講演アーカイブ、研究調査、広報・出版が含まれる。これらの担当部署は多様である。図書館では、Nolen Library in the Ruth and Harold D. Uris Center for Educationを中核としてアーカイブの収集提供・研究・教育機能をもつものとなっている。アーカイブとしては、文献、定期刊行物、写真をはじめとする学術研究資料を印刷媒体及び電子媒体として保存・公開している。

オンライン関連では、Collection Database及びHeilbrunn Timeline of Art Historyなどによって資料検索可能にしている。Thomas J. Watson Libraryといった既存の図書館とは別に、Lita Annenberg Hazen and Joseph H. Hazen Center for Electronic Information Resourcesを通じて様々なリンクを提供して学術研究に資する形態を維持している。

イメージ資料としては、Image Libraryがデジタル、アナログの所蔵作品画像の有料提供を行う。

教師教育資料としては、教育課が開発・提供するプログラム、ワークショップ、情報媒体を学校教師がカリキュラム編成や授業開発で美術作品を利用できるように支援することを目的としている。

講演アーカイブは、メトロポリタン美術館が提供する多様な講演、シンポジウムの記録、画像を保管し、閲覧可能としている。

美術館・博物館でのキャリア志望の高校生、大学生を対象としたインターン

シップ、美術史及び美術品修復領域の長期奨学生、研究者の受け入れもやっている。

2. 美術館教育普及関連

教育課が提供するプログラムへの実質的な受け入れ参加者数は、年間15万人であるが、希望者は、その約5倍ある。経費や物理的制約から選考を行っているのが実情である。このうち3分の2がニューヨーク市からの参加であるが、残りはニューヨーク州や州外からの参加もある。

米国の美術教育に対する対応は社会的状況、主に経済事情に左右されやすく、80年代以降の教育のエクセレンスを求める状況で芸術教科もコアカリキュラムとして位置づける動きがあったが、2001年の9.11テロ以降、ニューヨーク市でも教育予算がカットされ、多くの学校で美術が必修教科からはざされた。一部の学校で週45分を確保するのがやっとではないか。

メトロポリタン美術館でもそのあおりを受けて、来館者数の減少が見られたが、最近ようやく回復傾向にある。しかし、今回の金融危機で再度落ち込むことが予想される。そのため、美術教科だけでなく、理科でも利用可能なようなリーチアウトプログラムを開発しようとしている。

鑑賞学習に関しては、VTS(Visual Thinking Strategy)といったquestioning strategyと美術内容の定着を目指す方法を組み合わせて実施している。教育課には、常勤8名、非常勤2名の教育普及担当者があるが、一般家族、学校、成人プログラムと分掌をしている。究極的な目標としては、鑑賞を「楽しんでやるかどうか」「館を出る際に笑顔であるか」であり、その目的に合うよう方法を採用する。VTSのような方法が効果がある場合もあれば、直接的な情報straight information、すなわち知識を伴う直接的な情報を与える場合もある。対話型鑑賞というSocratic methodも、表層的に流れたり、対話が深化しない場合には適宜内容に関連する質問や情報提供を行う。

美術他、社会科学などの利用も視野に入れた方法を採ることを含めている。

鑑賞対象としては、教師の興味・関心に基づくものをスタートラインに据え(一次資料としての作品)、そこから質疑応答を行う。その後は、図書館やオンライン資料の活用を勧める。対話型の学習方法で危惧されるのは、一部に、内容が誤って理解されること(deceiving)な場面が見られることであり、その場合は、やはり文献資料などにあたることを教師教育では重視している。

また、グループワークも行っており、一つの画像に関する対話型からスタートして、分析を行うが、途中画像についての情報提供も行うが、意見交換に関してはオープンエンドであることが重要である。

終末時には必ず、リフレクションを行い、気づき、事実確認などについて、review, reflectすることが重要である。また表現学習との関連を時間がある場合には考えるよう示唆している。

鑑賞学習の重要項目としては、以下の5項目を考えている。

- (1) 感情的な関与があるかどうか emotional
- (2) 美術に関連する専門用語を獲得したかどうか vocabulary
- (3) 発想や気づきをコミュニケーションできたかどうか communicate ideas
- (4) 学級の全員の参加度はどうであったか classroom attendance
- (5) 記憶の強化につながったかどうか memory strength

しかし、最終的には「笑顔」が見られたかどうか学習の最大の焦点である。こうした目的を支えるためには、教師側に、作品に関する情報の組織化organization of information、発想や気づきのプレゼンテーション presentation of ideas、美術用語の利用 vocabularyに関する知見が求められる。

■ 韓国における美術教育・関連学会の役割と楽しみ方

香川大学 ■安東恭一郎

韓国美術教育学会は年に二回開催されており、参加者も発表者も多く、たいへん盛況で会場の熱気は日本とかわらないが、何度か参加し発表している中で日本とは異なる学会の役割を感じることがあった。本稿では、日本の美術教育関連学会と異なる側面について報告したい。

韓国の美術教育・関連学会の特徴の一つに学会開催参加者に小中高の現場からの参加が多いことがあげられる。日本でも現場教師の発表や参加は多いが、その規模が違ふ。韓国の現場先生方は、地区ごとにバスを貸し切り、学会会場に大挙してやってくる光景をよく見かける。日本ではせいぜい現場の大学院生が指導教員や院生といっしょに車で相乗りしてくるのが散見されるが、韓国の先生方はとにかくその勢いが違うのである。そして、先生方は参加するだけでなく、発表者も多く学会誌投稿も盛んである。大勢の先生方が学会にどのような役割を果たしているのかをよく見てみると、かなり現場教育と密接に関連させて位置づけていることがわかってくる。

ここでは大学の研究者と現場教師の役割が明確でお互いに美術教育を補完しているのである。学会の全体会では教育学会の主たる大学研究者・理事が自身の美術教育研究について解説する。会場ではたいへん理事の発表内容に併せた本を売っている。最近のテーマは「韓国や東洋の伝統美術」といった内容が多い。そして、それを現場教師が教育現場において「韓国や東洋の伝統美術をいかに教材化するか」といった観点から鑑賞の授業の提言をしたり美術表現の実践を報告・発表したりする。さらに学会会場では研究者が、そうした実践者に対してアドバイスしたり評価したりする状況が見られる。したがって、発表者や参加者は多いのだが、テーマそのものは日本のように多岐に渡るのではなく、いくつかのテーマを共有し、問題点や課題を整理しながら整理と発表されているといった感じである。

このような状況であるから、学会は現場教員にとっては最新の理論を得ることができ、解説もあり、さらに現場発表をしたり実践について研究者から適確なアドバイスを受けたりすることができる場面として機能しているのである。すなわち、学会と現場は相互に必要とされ、半期ごとの確認場面とし

て位置付いているように見えた。

韓国の大学教員は日本よりずっと現場教員から慕われ、尊敬されているような気がしてきたが、それは何も儒教の伝統を背景としているだけではなく、大学が現場に対して研究と実践を繋げる努力と実質があり、現場もそれを必要としているからこそそうした関係性が築けるのだろう。

ところで、韓国の学会ではたいてい最終日にツアーが企画されており、会場地域近隣を1日かけて巡る。日本の学会でも以前はそうした企画が日程表に組み込まれていることがあったが、気が付けば最近そうした場合は無くなってしまった。韓国のツアーには、大学が所有する大学バスや貸し切りバスを利用することが多い。

乗り込む時にはお菓子の入った袋が配られ、みかんやリンゴももらえる。お酒は配られない。韓国の観光バスは日本の鉄道車両の座席のように座面を対面にすることができ、仲良し同士で陣取りあつという間に遠足気分の室内となる。観光案内の冊子はかわいい手作りでの冊子を作るため実施大学の美術教室では学生達が活躍する。冊子には観光案内だけではなく修学旅行の冊子のように流行の歌などのページもあり、案内の先生が音頭をとって歌をいっしょに歌う場面もある。

学会ツアーに参加すると、こうした場面に遭遇でき、学会会場では知り得ない韓国の人々の楽しみ方や嗜好を知る機会となるので、学会以上に参加が楽しみである。

■ 日本の伝統・文化理解と国際交流

千代田区立九段小学校 ■竹内とも子

■題材名

『Wahoo!でいこう』
畳に座って鑑賞



私は、小学校で図画工作の専科教諭をしております。残念ながら、現在、教科指導を通して国際交流は実施しておりませんので、自国の伝統や文化を世界に発信できる資質や能力をもった子どもの育成という観点での取り組みをここでご紹介いたします。

第6学年の鑑賞題材「日本の美の形」では、俵屋宗達の「風神雷神図屏風」の鑑賞に始まり、その他の屏風・掛け軸などの絵画表現や、それらを含む「しつらえ」について取り上げました。室内に季節を取り入れる日本の感性や、おもてなしの心の表現などに触れる機会となったのではないかと考えています。

その後、「春」「今卒業に向けて思うこと」「将来の夢」などのテーマで、墨の特徴を生かして絵に表す表現活動につなげました。

さらに、季節の美しさを取り入れる和菓子の鑑賞から、カラー粘土でのオリジナル和菓子をつくりました。近所の和菓子屋さんから一つだけ本物を購入。それを児童の作品と一緒に展示することによって、視覚だけでなく、嗅覚も使って真剣に(?)鑑賞していました。食べる和菓子を見る(鑑賞)対象としても味わうなど、見方が変わったという感想もありました。

校内に茶室がある学校では、おもてなししたい人をそれぞれ想定し、自分たちの掛け軸を床の間に掛け、お茶を互いに点てていただく活動も行いました。子ども達は、自分たちの作品を鑑賞するだけでなく、作品のある「和」の空間・時間も味わっていたのではないのでしょうか。

こうした取り組みは、本題材単独で行われるのではなく、他学年での題材や、道徳、社会科、総合的な学習の時間での地域理解教育や国際理解教育などとの関連も図りながら実施されています。

■ ドイツにおける美術教育の動向

高知大学 ■金子 宜正

2008年11月、私は平成20年度日独青少年指導者セミナー(芸術分野)派遣事業(文部科学省委託事業)によりドイツに派遣された。約2週間にわたって、ベルリン、ポツダム、ライプツィヒ、ハノーファー、デュッセルドルフ、ケルンの学校教育機関、学校外の美術教育機関、芸術大学、美術館、青少年教育に関わる行政機関等において美術教育上の意見を交わすとともに、各地で美術教育視察を行なうことができた。ドイツの学校は、通常午前中で授業が終わるため、午後は学校外の美術教育機関のプログラムに参加できる。学校外における美術教育機関は場所によって様々であり、学校の授業の一環として学校外の美術教育機関を活用するなど、密接な連携がなされているところもあった。ベルリンでは、近年、文化や芸術が人格形成に及ぼす影響が指摘され、美術教育の重要性が再認識されているとの話があった。デュッセルドルフでは、子どもが文化的なもの(美術館等)に接する機会を与える試みがなされていた。このように、ドイツでは美術教育が人間形成に与える教育的価値が見直され、社会が子どもの文化的な育成を支援する様子がみられた。

更に、ドイツにおける美術教育視察では、会話や討議、文章等を介した授業展開など、美術教育を通して言語能力や論理的な思考力を発展させる方向性がみられた。授業中の子どもの論理的な発言や言語表現力には、眼を見張るものがあった。これには、ドイツの社会環境や家庭生活等の日常的な背景もある。思考力や言語表現力を高めるための契機を与えることは、我が国の美術教育においても重要であり、議論を重ねていく必要があると考える。

■ ロンドン大学ゴールドスミスカレッジから

筑波大学 ■直江 俊雄

1: 近況

過去2年ほどは、とくに校務等で多忙になり、外国美術教育事情について報告できるような調査はできていません。今年度は、6月より2月まで本学の国際連携室よりの派遣でロンドン大学ゴールドスミスカレッジにて研究を行うことになりました。

2: 美術教育国際研究誌への投稿ご案内

International Journal of Education through Art (『芸術による教育国際研究誌』)の編集委員をさせていただいており、日本の研究者からの投稿を歓迎いたします。本誌は査読付きの学術誌で、年三回刊行。応募締め切りは特になく、随時受け付けて審査を行います。英文で6000語以内、原則として電子メールでの提出になります。投稿の詳しい案内は、InSEA国際美術教育学会のサイト内に掲載されていますので、参照してください(<http://www.insea.org/publications/journal/index.html>)。なお、InSEA会員以外の方も投稿することができます。ご質問等ありましたら直江までお問い合わせください(naoe@geijutsu.tsukuba.ac.jp)。

■ ドイツで芸術教科新カリキュラムの調査

神戸大学 ■鈴木 幹雄

2008年11月末から12月初旬、神戸大学発達科学部教育研究推進経費を活用してドイツ連邦共和国ノルトライン=ヴェストファーレン州デュッセルドルフ市の文部省に初等学校芸術教科新カリキュラムの調査に行きました。

調査・研究の視点は、グローバルゼーションの下でのカリキュラム作成上の現実的対応と、デュッセルドルフ芸術大学出身者を芸術教員に多く抱える同州における芸術教育学の伝統とのほごまで関係者達が何を考えているか、その一端を明らかにするというものでした。

同州文部省では初等学校カリキュラム担当官2名に事情を聞くと同時に、新規初等学校芸術教科新カリキュラムの取りまとめをされた、ミュンスター教育区教育委員会のハイデマリー・ゴスマン氏(女性)から新カリキュラム取りまとめの視点をお聞きし、関連資料を戴く事ができました。

成果は、後日投稿原稿にまとめるか、報告書にまとめたいと思います。

■ 国際交流の実践について

山口大学 ■福田 隆真

国際交流の実践として主に二つの内容を実施しています。一つは山口大学教育学部美術教育教室として、台湾の国立台北教育大学との交流による事業です。もう一つは個人的な内容で、主に文部科学省の科学研究費補助金によるアジア地域の美術教育の調査です。

一つめの台北教育大学との交流は、平成18年に台北教育大学美術系の学生の卒業制作展を11月に山口大学で開催しました。同時に国民文化祭が山口で開催されており、台北教育大学の学生さんも出品されました。平成19年11月には台北教育大学において山口大学美術教育の学生作品展を開催しました。これらの作品展によって学生、教員の交流が進んでいます。

二つ目は、平成7年から個人の研究として進めているアジアの美術教育の一部です。平成20年度よりシンガポール、マレーシア、台湾の美術教育の教育課程、教育実践、教員養成について調査研究を行っています。これらの個人的調査を基に、研究者との交流、実践者との交流を少しずつ進めています。

■ 国際交流情報編集後記

■ 各方面でご活躍の国際交流委員に2009年3月23日付で原稿依頼、全員の原稿が5月20日に集まるか心配していました。新総務理事の竹内とも子(千代田区立九段小)・理事長推薦による煤孫康二(岩手大)の両新委員を含め委員全員が提出くださり、感謝申し上げます。「創刊の言」に安東恭一郎委員が記されたように創刊号が「刺激的な発信源」としての第一歩となったのではないかと自負しています。他の役職に専念のため退任の中村和世・福本謹一の高委員、お世話になりました。ご意見ご要望を下記まで送信いただけましたら幸いです。

大塚美術教育学会のみなさんのご活躍を祈念しております。

宇都宮大学: nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp 山口喜雄